「アンフォルム」

作　サカイリユリカ

登場人物

男　友人（本人談）をひたすら待っている男。
女１　死体？の傍にいる女。
女２　荒野を放浪する、行くアテのない女。

【プロローグ】

何もない吹きっさらしの荒野。舞台中央には寝袋が一つ。
女１が一人、舞台上手、地面に座り込んで、赤い積み木を積んでは崩し、積んでは崩し・・・を繰り返している。
女１、眠たいのか、だんだんこくりこくりと首を動かし始める。

舞台上に、黒衣をまとった人物が二人、風のように現れる。
二人は寝袋を覆い隠すように佇んでいたかと思うと、ゆっくりと離れ、寝袋の周りをぐるぐると歩き回り始める。
女１、はたとそれに気づき、勢いよく立ち上がる。
立ち上がった拍子に、積み木は崩れる。

黒衣をまとった二人は、寝袋から離れたかと思うと、また近づいては怪しく黒衣をひらめかせる。
女１は呆然としているが、二人が寝袋に触れようとすると、
二人に走って近づき、手を大きく振って追い払う。
二人は風のように舞台上から去っていく。

静寂。
女１は辺りに誰もいないことを確認すると、自分の傍らまで寝袋を引きずってくる。
そして、ゆっくりと寝袋のジッパーを開ける。寝袋の中には骸骨。
女１、骸骨をゆっくり見つめ、その頬に触れる。
そのまま、寝袋ごと骸骨を抱きしめる。

【虚空】

女１、骸骨をそっとまた寝袋の中に戻そうとする。
と、男が下手からやってくる。男、咄嗟に女１に会釈する。
女１、驚いて咄嗟に寝袋のジッパーを閉め、自分の後ろに寝袋を隠す。
女１、何事もなかったかのように、赤い積み木を積み始める。

男　　あの。
女１　（無視する）
男　　すいません！

女1、しぶしぶ動きを止める。

男　それ、一体。
女1　誰だ。
男　え。
女1　なんの用だ。
男　あの、ここでちょっと、待たせてもらいます。
女1　待つ？なにを？
男　俺の、友人です。ここに、来るはずなんで。
女1　こんなとこに人が来るわけないだろ。

赤い積み木をカチカチと打ち鳴らし始める女1。

男　ええと。なにをしてらっしゃるんですか。ソレ。
女1　肉。
男　は？
女1　肉を切ってるのさ。
男　はい？

女1、無言で赤い積み木をこすり合わせ始める。

男　肉を・・切るって・・そもそも、なんの肉なんですか。
女1　なんだっていいだろう。
男　なんだっていいってことは、ないと思うんですがね。
女1　肉は切っても骨は断たないのさ。
男　ええ？それを言うなら、肉を切らせて骨を断つ、じゃないんですか。
女1　うるさい。
男　あなたの方がうるさいですよ。それ、音。
女1　いいんだ、誰も聞いてやしないから。
男　俺がいるんですがね。
女1　何も邪魔はしてないだろ。
男　そうですけど、気が散ります。
女1　根性のない奴だな。

間。

男1、沈黙に耐えられないかのように、腕にはめたアームスピナーをくるくると回し始める。

女1　なんだい。
男　はい？
女1　それだよ。
男　あぁ。つい。
女1　変な奴。
男　やることないんで。
女1　まだ待ち始めたばかりだろ。
男　だって暇じゃないですか。
女1　はぁ。

間。

男　で、肉っていうのは、
女1　（遮って）来ないよ。
男　え？
女1　来ないんだよ、お前が待ってる、その。
男　言い切れますか。
女1　こんなとこに人が来るか。
男　あなたがどれくらい前からここにいるのか知りませんけど、来ないとは限りませんよ。
俺はここで待つんですから。待たされてるんですよ。
女1　もうくたびれてるくせに、か。よく言うよ。
男　くたびれてるんじゃなくて、することがないから。あぁもう。

男、腕にはめたアームスピナーとじゃれあうかのように体をよじる。

女1　あきらめの悪い奴だね。
男　よく飽きませんね、あなたは。ずっと肉だかなんだか切っていて。
ていうかそれ、積み木でしょ。
女1　少しは黙ってろ。
男　いいじゃないですか、話し相手にくらいなってくださいよ。
女1　何の義理があって、お前に付きあわにゃならん。
男　いま、隣にいるじゃありませんか。

女１　それだけか。
男　　他に理由がいりますか。
女１　はあ。疲れるな。人の相手は、ほんとうに疲れる。
男　　まあま、そう言わず。ね・・。

どこからともなくステッキを持った女２がやってくる。
男、思わず女２に会釈する。女２は舞台中央まで来ると、無言で辺りを見渡す。

女２　ここはどこですか。
男　　はい？
女２　（ステッキで舞台奥を指し）あっちにはなにがあるんです？
男　　なにかあると思います？
女２　いいえ。なにも見えません。ただ暗い平野が、広がっているだけです。
女１　ここにはなにもない。
女２　なにもありませんか。
女１　あぁ。
男　　俺らがいますけどね。

女２、ステッキを掲げて、手を離す。
ステッキが、空中から地面にことり、と落ちる。

男　　なんですか。
女２　そっちみたいです。
男　　なにが。
女２　私の進むべき道です。
　　いつもこうして決めてるんです。
男　　はあ。
女２　さようなら。

女２、舞台奥、ステッキの向く方角へ向かって歩いていこうとする。
――と、空間に低い音が響き渡る。
女２、歩みを止める。
男と女１も動きを止めて、音のする方向へ耳を澄ます。

男　　なにか聞こえませんか。
女２　聞こえるような、聞こえないような。

男　誰かいたりして。
女１　そんなはずがない。
女２　なんですか、急に。
女１　誰もいないんだよ、ここには。

三人の沈黙。音は大きくなり、うねっていく。
女１、身を丸めて耳を両手で塞ぐ。

女１　黙れ、うるさい、うるさい・・・
女１の積み木を鳴らす音がいっそう大きくなる。

男　気味悪いですね。
女１　黙れ、黙れ・・・

男、女２、身を丸める女１を見て、話しかけようとするが、話しかけられず、時間を持て余す。

男　なんなんだか。
女２　（イライラして）私にはなんだかよくわからない。

男はアームスピナーをひっきりなしに触って回したりする。
女２はステッキで地面をせわしなくつついている。
夜が落ちてくる・・・。

男　なにも、見えませんね。
女２　見えないけど、なにかいるような気がする。
男　いますかね。

【風】

音はだんだん夜の風の音に。だが、風の音が誰かのすすり泣く声にも、叫び声にも聞こえるような気がしてくる。

男　誰か、泣いてませんか？
女２　まさか。
女１　考えすぎだ。ただの風さ。

女２　（奥の空間に向かって）誰か、いらっしゃいますか。
男　いないよ、誰も。
女２　おーい。
男　やめろよ。
女２　（止めない）おーい。
男　ああもう！もし誰かいるなら、なんか言ったらどうなんだよ。
女２　しっ。

女２、女１の方をステッキで指す。

女２　それはなんですか。

女２の指した先には、寝袋がある。

女１　（すかさず）丸太だろ。
女２　丸太。
女１　そうさ。ただの、朽ち果てた木だよ。
男　・・・誰か、寝てるんですか・・・。

男、おそるおそる寝袋に近づいていく。
女１、イライラして、まるで警鐘を鳴らすかのように赤い積み木を打ち合わせて鳴らす。
男の動きは止まらない。男、さらに寝袋へ近づく。
女１、あッと叫び、積み木を男に向かって投げつける。
男、驚いて止まる。

男　何するんです。
女１　お前が悪い。
男　俺が何かしましたか。
女１　こんな丸太、放っておけばいい。
男　あなた、丸太丸太って言いますけどね、それはどう見ても。
女１　くそったれが。お前はおとなしく誰だかを待ってろ。
女２　誰か、待ってるんですか。
男　あぁ、はい。
女１　来ないがね。
男　だから。

女２　誰を待ってるんです。
男　古い、友人です。ここで待つように言われていて。
女２　ここで、ねえ。
女１　お前、だまされたのさ。きっと今頃、その友人はどっかで羽を伸ばしてるだろうよ。
男　勝手なこと言わないでください！
女１　どっか行け。どうせ来ないんだ。
男　やめていただけますか、決めつけるのは。
女１　こんな目印も何もないところにどうやって来るんだよ！
男　約束してるんです！

２人が言い争っている間、女２は勢いよく女１の後ろに回り込み、寝袋を舞台中央まで引っ張ってくる。

女１　おい、なにやって。
女２　調べましょう。
女１　やめろ。
女２　なぜ？
女１　なんでもだ。
女２　嫌です。

女２、さらに寝袋をステッキで突き、叩いてみようとする。

女２　これ、ほんとに丸太かしら。
男　どれどれ。

男も便乗して寝袋に触ろうとする。

女１　やめろ。

女１、すっくと立ちあがる。

女１　やめろって言ってるだろ。
男　なにムキになってんですか。
女２　なんなんですか、これ。
女１　なんだっていい！

男　よくない！
女１　関係ない、お前たちには！
男　見せてください！
女２　なんでそんなに怒ってるんですか！
女１　怒ってない！
女２　じゃあ見せてくれてもいいでしょう！！
女１　嫌だ！！

体の動きへシフト。諍い、罵り合い、叩きつけるような動きへ。
三人のダンスのような、殺陣のような身体表現のシーン。
自分ではない何かに身体を突き動かされるかのような、衝動的な、ダイナミックな動き。
整頓されてない、予測のつかない動き。寝袋を奪い合って、ひっぱりあうなど。

【火】

地面に寝袋が落ちる。少し辺りが明るくなる。
肩で荒い呼吸を繰り返している３人。

男　なんなんだ。
女２　こっちのセリフです。
女１　（寝袋の前に立って）これは私のもんなんだ。
お前ら気安く触るんじゃない。
男　あなたのなんですか、これ。
女１　・・・あぁ。
男　この、丸太が？
女１　・・・（睨む）
女２　これ、なんなんです。
女１　え。
女２　この中に、なにかあるんでしょう。
女１　お前たちには関係ない。
男　もしかして・・・。
女２　どうしました？
男　もしかすると、俺の、友人だったり、しますか。
女２　おともだち？
男　そう、俺がここで待ってる、友人です。待てども待てども、来ないんです。

もしかして、俺が遅かったから、もうここにきてるんじゃないかなって。
（寝袋に）おーい、お前か、お前なのか。
女１　待ちくたびれて、おかしくなっちまったのか。
女２　じゃあ、なんなんです。
女１　知らん。
男　知らないってなんですか。
女１　いいんだよ、誰だろうと。
男　あなた、なにか隠してません。
女１　ああもう、これだから人間は嫌いだ。興味を持ったら、とことん追求しようとする。うんざりだよ。

間。

女２　これ。ひょっとして、この中で、誰か死んでるんですかね？
男　死んで。
女２　もし、人なんだとしたら。
男　やめてくださいよ。縁起でもない。

女１、寝袋を自分の方へ引っ張っていこうとする。女２、それを見て、

女２　そんなに大事なんですか。
女１　・・・。
女２　人の大事なものって、他人からするとそうでもなかったりするんですよね。
女１　だからなんだ。
女２　たいしたものじゃないのでは。
女１　そんなことない。
女２　こんな、雨風ふきっさらしの場所に置いてる時点で、大事じゃないんですよ。ほんとは。
男　それはどうなんでしょう。
女２　思いませんか。
男　いやあ。
女２　あなたも、その、待ってる友達？大事なんですか？
男　え？
女２　どれくらい大切なんです？
男　それは。

女２　どれくらい待てるんです？
男　ええと。
女２　やめたら。
男　はい？
女２　待つのなんて、やめたらいいんじゃないかって言ってるんです。
女１　あんたに関係ないだろ。
女２　関係ないからこそ、言ってるんです。

間。

女１　お前ら、こんなとこで油売ってないで、さっさとどっか行きな。
男　嫌だ。ここで待たせてもらう。
女２　じゃ、ずっとここにいるんですか。
男　そうですよ。ヤツが来るまで。
女２　来なかったら？
男　そんなことは考えない！
女２　はあ。
女１　コイツは相当幸せな脳みそをもってやがるんだよ。
女２　そうかもですね。待っていいことがあるなんて限らないのに。
男　逆に、どっかに行ったらいいことがあるとも限りませんよ。

間。

女２　ご友人、ここまでたどり着けますかね。自分を見失わずに。
男　どういう意味だ。
女２　ずっとね、この地平線をただ歩いていると、自分がわからなくなってくるんです。
とっくに自分の輪郭なんてぼやけてしまって、自分が二本足で立ってる人間だったかどうかも、だんだん・・・
男　少なくとも、立ってますけどね、いま。
女２　たまらなくなるんです。気づくと地平線に陽が落ちて、また眩しくなって、ああ、私が受け取ってるのは網膜からの光の情報だけで、それでこの世界は成り立ってるのかって。それって、たまらないですよ。
女１　どこから来たんだ。
女２　え。
女１　ここにくる、前。

女２　あまり覚えていません。でも、人がたくさんいるところでした。
あまりにも人が多くて、私はたくさんの人に紛れて、カタマリの一部になって、それがどこか安心できた・・・
女１　今は、カタマリじゃなくなったんだな。
女２　そうです。でも、いざ１人で歩いてみると、こんなものに縋らなきゃ歩けもしない。
（ステッキをみつめて）ほんとはこんなもの・・・

女２、持っているステッキを自力でへし折ろうとする。が、折れない。

女２　ちくしょう。

女２、自嘲しながらステッキを拾い上げ、ステッキで寝袋を突く。

女１　おい。
女２　あなた、このまま、これと心中でもするわけ？
女１　知らない。でも、いいんだよ。これで。このままで。
女２　ふざけないで。
女１　大まじめだよ。
男　　ああもう。
女２　私が解放してあげる。
女１　そんなの、望んでない。

女２、俊敏な動きでステッキで女１の身体を動けないよう、押さえ込む。
女２、男に目で合図を送る。

女２　開けて。
男　　え、でも。
女２　はやく。

男、促されるように、寝袋のジッパーへと手をかける。
女１の叫び声と雷鳴がかぶさる。
閃光のような雷の眩しさに、寝袋から半身を曝け出した骸骨の姿が晒される。

【水】

雨が降ってくる。骸骨を囲んで佇む３人。しばしの沈黙。

男　これ、
女２　やっぱり人だった。
男　・・・誰なんですか。
女１　・・・
男　誰なんですか！
女１　・・・（つぶやくように）思ってる。
女２　なに？
女１　私を産んでくれた人だと、思っているよ。

間。

男　それは、お母さんということですか。
女１　・・・。
女２　このひと、なんで死んだんでしょうね。
女１　死んでない。
女２　ん？
女１　死んでるけど、ここにいるだろ。
男　あの、ほんとうにお母さんですか？あなたの？
女１　誰が、ほんとうのことがわかるっていうんだ。
ここに、このひとがいて、私がこの人から生み出された。
それが事実じゃないか。
男　・・・これだけ白骨化してると、男か女かすらわからんな。
女２　そういえば、あなたが待ってる友だちは、男なんですか。
男　そうだなあ、男だった気もするが、女だった気もする。
女２　なにそれ。覚えてないんじゃないですか。
男　覚えてるよ。はっきりと。いまでも忘れられない。最後に会った時に、
握った手の感触。約束したんだ。また会おうって・・・
女２　・・・そのひと、ではないの。この骨は。
男　違う。そのことだけは、ハッキリとわかる。だってアイツは、骨の一部に
金具を入れてるんだ。
昔ケガしちまったから。だから・・・だからコレはアイツじゃない。
女２　金具がどっか行っただけかもしれないですよ。

男　あいつがコレだったらどんなにか良かったか。
女２　なんで。死んでるのよ。コレは。
女１　死んでない。そして、お前の友人でもない。
女２　おかしなひとたち・・・
間。

男　雨って、鉄さびのにおいがするな。
（アームスピナーの匂いを嗅いで）これみたいだ。
女１　血の匂いが、するってか。
女１は積み木を打ち鳴らし始める。
女２　なんですか、こんなときに。
女１　肉を、切ってるんだ。
女２　肉？
女１　肉が、邪魔だったから。邪魔なんだ。まだ、これは、完璧じゃない。
もっと、綺麗にしてやらないと。
女２　それって。
女１　鉄さびの匂いがするって？じゃあ、きっとまだ、肉が引っ付いてるんだな。
女２　（女１に）あなた。
男　アイツはね、俺が待っててくれると思ったら、生きてられるって言ったんだ。だから俺は、何度も力強くうなずいた。
俺はいつまでだって待ってるから、生きてくれって。
女２　その友達は、鉄さびの匂いがしたの。
男　そういう風に、俺は覚えてる。

女１、骸骨に近寄って、

女１　かわいそうに。こんなに濡れちまって。でももう、あとは綺麗になるだけだよ。

女１、骸骨を愛おしそうに撫でる。

女２　バカみたい。
女１　なんとでもいえばいいさ。あぁ、さっきは突つかれて痛かっただろう。
これ以上ヒビが入ったら大変だ。

女２　バカみたいだって言ってるんですよ、私は！

女２、ステッキを拾い上げようとする。女１、そのステッキを足で踏んで女２が拾うのを阻止する。
女１がステッキを持ち、女２にステッキの先を向ける。

女２　なにを。
女１　お前が粉々になれ。
女２　ちょっと。

女１、ステッキを振り下ろす。
避ける女２。二人の攻防。
男、そんな２人をよそに、またアームスピナーで遊び始める。

女２　なにしてるんですか、助けてください。
男　ちょっとくらいうるさい方が、暇も紛れるかなって。
女２　なに言って。
男　でもやっぱり、ちょっとうるさすぎますね。

男、ひょいと女１からステッキを取り上げる。

女２　返して。
男　嫌です。
女２　私の。
男　あなたも、こんなもの、なければいいんです。

男、遠くにステッキを放り投げる。女２、アッと叫んでステッキの飛んで行った方を見つめる。

女２　なに、して・・
男　これであなたはどこへ行くにも自由です。良かったですねえ。
女２　ちっとも良くないです。私、どうすれば。
女１　自分のアタマで考えな。
女２　無理です。もうやめたの、考えるのは。
女１　でも考えなくっちゃいけないよ。
女２　そんなものに囚われてるあなたに言われたくない。

女１　お前には分からんかもしれんが、こう見えて、私は自由なんだ。
女２　どこが。
男　俺はあえて不自由を選んでいる。自分に枷を課して。
女２　私には理解しがたいですね。
女１　わかってもらおうとなんか思ってないさ。
女２　それって、寂しくないんですか。
女１　もう、忘れたよ。

間。少し辺り、明るくなる。いつの間にか、雨が止んでいる。
女２　朝なんか来なければいいのに。永遠に。

間。

男　あなた、なにに怯えているんですか。

【土】

女２、うつむいている。

男　あなたは今、どこへでも行けるんですよ。
女２　気づいたら、またカタマリが恋しくなった。でももう、戻れやしない。
女１　ほう。
女２　だって、私はもう、捨てたんです。離れても離れても影法師みたいにくっついてくるカタマリを・・
女１　案外、戻れるんじゃないか。
女２　でもそれはすごく苦しいことなんです。だからずっと一人で、来たんですから。
女１　一人？違うな。いるじゃないか、お前の影法師が。
女２　え。
女１　歩いても歩いてもつきまとってくる、お前自身の影法師。

女２、恐る恐る後ろを振り返る。ぼんやりと自分自身の影が浮かびあがる。

女２　ああ、だから朝は嫌い。いつも、私は夜に歩くんです。なぜだかわかりますか？
自分の影法師が、夜闇に紛れて、どこかにいってしまうから。

女１　錯覚だよ。
女２　いいんです、錯覚でも何でも。
男　でも、目に見えないからって、存在しないわけじゃないだろ。
俺はいつだってアイツがいるのがなんとなくわかるよ。
どこにいるのか、そういうことじゃない。ただ、この世界のどこかにいるってことだけ、ハッキリしてるんだ。
女２　私、そんなに何かを信じられない。
女１　じゃあなんでここに来た。
女２　それは・・その、杖が、勝手に
女１　お前が求めてるからだよ。
女２　そんなこと。
男　俺がなんでここで待ってるか教えてやろうか。ほら、あそこ。
地平線から太陽が顔を出すのが見えるだろう。
アイツといつか、ここでこの景色を見たんだよ・・・だからきっとまた、
アイツはここに帰ってくるんだ。

間。三人、地平線を見つめる。

女２　ここに向かってくる途中、人影が見えたんです。蜃気楼かと思ったけど、
気づいたら、足が勝手に
女１　お前はお前に会いに来たんだよ。ここに。
女２　私に。
女１　そう。
女２　会いたくなかった・・・

女２、太陽の方角へ手を伸ばす。そっと、その輪郭をなぞるように撫でる。

女２　なにもない、ね。
女１　なにもない、だったら産み出せばいい。
女２　（自嘲して）どうやって。
女１　これみたいにさ。

女１、骸骨を指さす。
女１、積み木を拾い集めると、骸骨の骨から肉を削ぐような動作。

男　なにを。

女１　綺麗にしなきゃ・・・これは、私の母にならない。
女２　どういうことですか。
女１　これは母であってまだ母ではない。
女２　なんだか知りませんけど、これはもう死んでるでしょ。

女１、積み木を軽く打ち付ける。

女１　綺麗だろう。この、空っぽな音。
男　・・・

男、アームスピナーを回し、しゃらしゃらと音を鳴らす。

男　俺は、こっちの音の方が、綺麗だと思います。
女１　（積み木を鳴らしながら）肉はね、いつか腐って溶けてなくなってしまう。でもなかなか肉はこびりついてとれなくてね、もうずっとこうしているのに。
男　少し、ひんやりして、この金具が肌に摩擦して、これでいつでもアイツを思い出せるんです。

女１の積み木を打つ音と、男のアームスピナーの音が、虚しく響く。

女２　私には、わからないです。わかりたくもない。

間。

女１　生きてるから、そう思うんだよ。
女２　そんな音を聞きながら、生きていたくはない。
それ、いつになったら綺麗になるんです？
いつになったら完璧になるんですか？
女１　お前たちが来てくれてよかったかもしれない。だって、こうして・・

女１、骸骨を抱き起こして、お辞儀させる。

女１　私の母です。
男　どうも。
女２　・・・・。

女１　ほら、お前たちが母と認めてくれれば、これは母になるんだ。
男　はあ。じゃあ、俺もこれを鳴らし続けていれば、いつか友人に会えますかね。

女２、笑いだす。

女１　どうした。
女２　いえ、あの、私。いきます。（指をさし）あっちに。

間。

女２　あなたたちに付き合えません。これ以上。
それに、ここにいると、自分がどんどん輪郭を取り戻してきてしまって。
それが何より、嫌。
女１　そうか。
男　俺はここにいるよ。待ってる。
女２　・・そうですね。きっといつか、来ますよ。（女１に）あの。
女１　なんだ。
女２　お母さん、ですよ。それは、あなたの。
女１　・・・そうだな。また、カタマリに戻るのか、お前。
女２　わかりません。でも、少なくとも私はここにいるべきじゃない。
男　決められたじゃないですか。杖、なくても。
女２　・・・そうですね。ああ、私にはお日様は眩しすぎる。
男　いいんじゃないですか、影の中に混じっても。
女２　誰かの影に、混ざって生きていくほかないんでしょう。・・・では。

女２、もと来た方向へ去ろうとする。女１、去ろうとする女２の背中へ、

女１　生きてらっしゃい。
女２　（振り返らずに）はい。

女２、歩き去っていく。
その後ろ姿を見送る、男と女１。

男　さてと。
女１　私はここで、いつまでも、（骸骨に）そばにいるだけだ。

男　いつまでも？
女１　そう、いつまでも。

間。

女１　あれ、お前の待ってるともだち、来たんじゃないか。
男　（一瞬そちらを見て）そんなわけないじゃないですか。
女１　でも、
男　（微笑んで）来るはずがないんですよ。

男、アームスピナーを回しながら、水平線の彼方を見つめる。

女１　いや、誰か来たよ。間違いない。男か女か・・・わからんが。
男　だから、そんなわけ。
女１　嬉しいんじゃないのか。
男　それは。
女１　良かったじゃないか。
男　・・・俺、いきます。
女１　え。
男　来るはずがないんです。友人は。だから、ここじゃないんです。きっと。
女１　・・・
男　もっと、誰も来ないところで、待たなくちゃ。

男、逃げるかのように、その場を去っていく。

女１　はは、そうか。そうだな。

取り残される女１と骸骨。女１、骸骨を抱き起こし、しばし見つめ合う。
ふいに、骸骨を傍らに放り投げ、崩れ落ちる女１。

女１　やっぱり、お前は母さんじゃない。母さんになんて、なれっこないんだ・・・

間。

女１　ああ、疲れた。人の相手をするのは、ほんとうに、疲れる・・・

女1、空っぽになった寝袋に、積み木を詰めていく。

女1　はじめに、闇があった。そこに光がさして、光と闇の区別ができた。
そして空ができ、天と海は分かれた。
太陽と月が、昼と夜を作り、生き物が生まれた。
神は土で人間を形作り、形作り・・・

女1、自分で自分を抱きしめる。

女1　これこそ／わたしの骨の骨／わたしの肉の肉・・

女1　でも、これは器にすぎない。
ここに、命の息吹を、吹き込まなければ・・・

女1、ゆっくりと骸骨を抱き起こし、傍らに抱きかかえながら、ゆっくりと前方を指さす。地平線から太陽が昇ってくる。

女1　ごらん。あの真っ白な太陽、あそこから私たちは生まれたんだよ・・・

照明、眩しくなって一気に落ちていき――

終幕。